



2023. 04

漢方医学センター
センター長・教授
及川 哲郎

漢方薬の副作用

一般に漢方薬は西洋医薬と比べ、安全で害がないと思われています。西洋医薬の中には抗がん剤や抗精神病薬のような強い副作用を持つものがあり、そういった観点から全体の平均値で見ると、漢方薬は西洋医薬と比べて副作用が少ないといえるでしょう。しかし食べ物の中にもアレルギーを起こしたり、胃腸症状や湿疹が出たりすることがあるように、漢方薬にもまったく副作用がないわけではありません。皆さんに安心して漢方治療を受けて頂くためにも、今回は生薬・漢方薬の副作用について言及しておきたいと思います。

表に漢方薬に含まれる生薬の代表的な副作用の一覧を示します。黄芩(おうごん)は優れた抗炎症効果を持ちますがアレルギーを起こすことがあり、重篤な副作用として間質性肺炎、また比較的良好に見られる副作用として薬物性肝障害を起こすことがあります。甘草による偽アルドステロン症は高血圧やむくみが起きる副作用で、3%前後とする報告もあり最も頻度が高いものです。咳止めなどとして風邪薬に頻用される麻黄は動悸や血圧上昇、高齢男性では尿閉を起こすことがあります。その他、地黄による胃腸障害、大黄(下剤)による下痢、桂皮による湿疹、附子(もともとは神経毒であり、かつてはアイヌの人々が矢尻に塗って用いた)による動悸や舌のしびれも見られることがあります。さらに山梔子(さんしし)による腸間膜静脈硬化症は、多くの場合5年以上の長期間服用することで発症する蓄積性の副作用とされています。漢方薬を長く服用することが多い現代ならではの副作用ともいえるでしょう。

こうした副作用を未然に防ぐための決定的な対策は今のところ残念ながらありませんが、私は黄芩を含む処方を出すとき間質性肺炎の症状である空咳に対し注意喚起をしたり、2-3か月後には一度採血を行うようにしています。甘草を含む処方では、血圧や体重変化、むくみの有無を確認するとともに、採血検査なども行っています。麻黄を含む処方は、前立腺肥大や循環器系に問題のある高齢者には用いないようにしています。山梔子を含む処方は、加味逍遥散(かみしょうようさん)や防風通聖散(ぼうふうつうしょうさん)など更年期症状や肥満・便秘に対して長期に用いることも多いため、漫然とした長期使用にならないよう注意しています。このように当センターでは副作用に十分気を配りながら治療にあたっていますが、漢方薬を服用していて気になることなどがあれば遠慮なくご相談ください。

■生薬の代表的な副作用

黄 芩	間質性肺炎、肝障害
甘 草	偽アルドステロン症
麻 黄	虚血性心疾患、高血圧、胃障害
地 黄	胃腸障害
大 黄	下痢
桂 皮	湿疹
附 子	動悸、舌のしびれ(もともと神経毒)
山梔子	腸間膜静脈硬化症